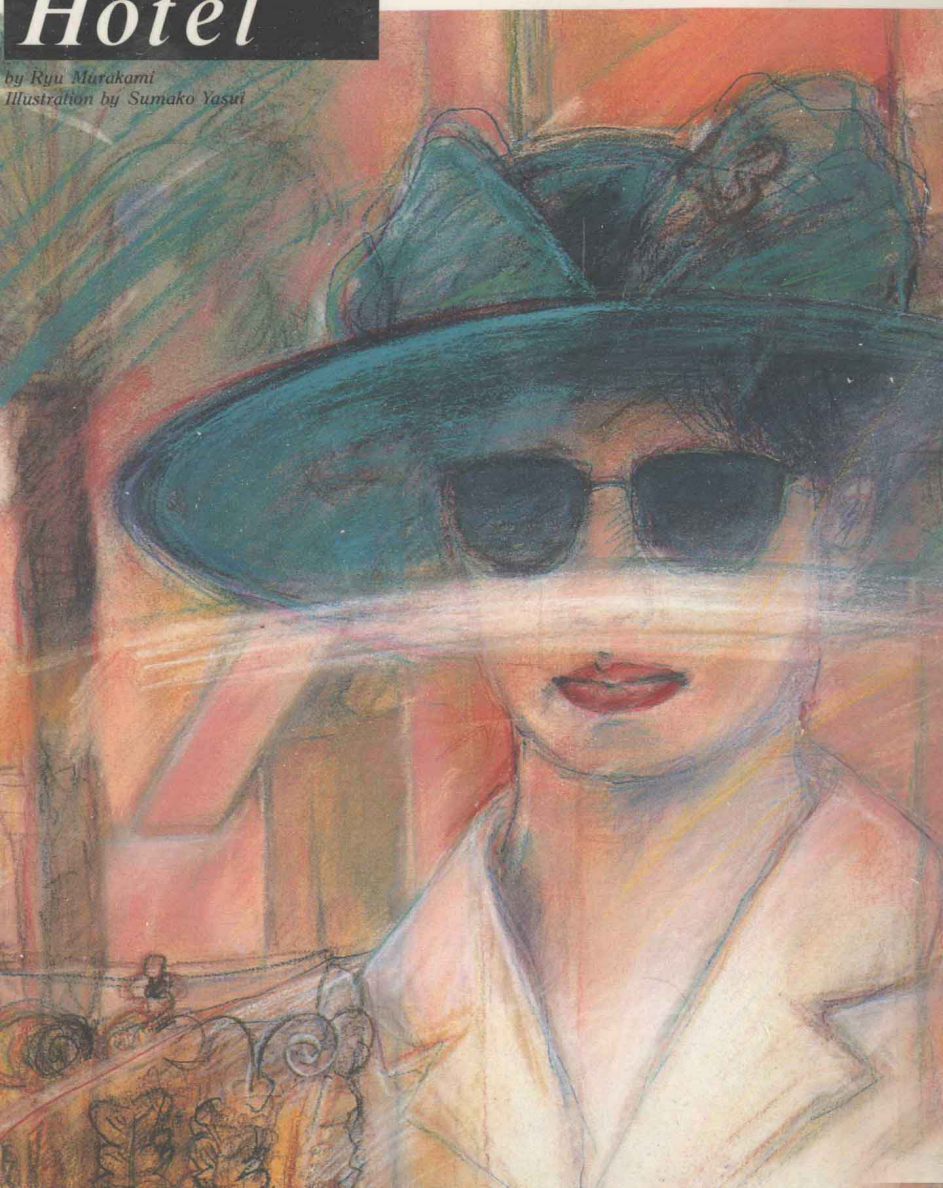
ラッフルズホテル：村上龍

Raffles Hotel

by Ryu Murakami
Illustration by Sumako Yasui



ラッフルズホテル：村上龍

Raffles Hotel

by Ryu Murakami
Illustration by Sumako Yasui

集英社

ラッフルズホテル

一九八九年 九 月一三日 第一刷発行
一九八九年 九 月二五日 第二刷発行

著 者 村上龍（むらかみりゅう）

発行者 若菜 正

発行所 株式会社 集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号 一〇一―五〇
出版部 （〇三）二三〇―六一〇〇
電話 販売部 （〇三）二三〇―六三九三
製作課 （〇三）二三〇―六〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。
本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1989 R. Murakami
Printed in Japan ISBN4-08-775133-3 C0093

ラッフルズホテル

Raffles Hotel

目　次

ニューヨーク　1　狩谷俊道　7
ニューヨーク　2　本間萌子　26
ニューヨーク　3　狩谷俊道　40
金沢　1　本間萌子　46
金沢　2　狩谷俊道　61
シンガポール　1　結城岳夫　74
シンガポール　2　本間萌子　97
シンガポール　3　結城岳夫　113
シンガポール　4　本間萌子　130

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

シンガポール（フレーザーヒル）　1　狩谷俊道　148
シンガポール（フレーザーヒル）　2　結城岳夫　165
フレーザーヒル（シンガポール）　狩谷俊道　174
耳の裏側の寂しいリゾート　本間萌子　183
シンガポール　5　結城岳夫　186
あとがき　188

カバー・扉絵　安井寿磨子
デザイン　服部優里

ラッフルズホテル

ニューヨーク　1　狩谷俊道

わたしがその女優と初めて会ったのは一九八六年のニューヨークだった。三月の終わり頃ではなかったかと思う。

わたしは二カ月くらいの予定でアメリカ東海岸に遊びに来ていた。ＵＰＩのクラウス・カッツァーマンに招待されたのだ。

わたしもクラウスも二十年前は戦場カメラマンだった。彼はＵＰＩの特派記者で、わたしは撮影したネガを切り売りする無名のフリーカメラマンにすぎなかったけれど、サイゴンのバーでいつも一緒だったし、六八年一月のテト攻勢、及び五月の第二次都市攻撃では一つの車に乗って戦場となったサ・ロ橋やトウドゥック通りを走り回った。

そういう生死を共にした者どうしというのは普通の友達以上の何かを共有する、などと言われるが、わたしはちょっとニュアンスが違うと思う。

例えば東京の銀座のバーなどで当時ベトナムにいたカメラマン仲間やジャーナリストと会う

と、最初は無性に懐しくてうれしいが、しばらくすると話題がなくなってくる。話すべきことがないわけではなくて、東京の銀座というシチュエーションが、戦場の思い出話を妙に嘘っぽくしてしまい、疲れるのである。

昔からわたしは少々ひねくれ者のところがあったので、そのせいかと思っていた。だが、あれはわたしが著名人のポートレートを撮り始めた頃だから八〇年代の初めだと思うが、われわれ戦場カメラマンの指導的な立場にあった朝日新聞のS氏に会った時同じことを言われて、ああ誰でも同じなのか、と考えてしまった。

「……こうやって、君と、いや君じゃなくてもね、ほらあの日経のT君とか、日本テレビのUさんとかね、つもる話は山ほどあるわけだ、山どころじゃないな、今のオレの生活感からすると大山脈ほども思い出話がある、それで、昔の連中と会うと酒もうまいから酔いにまかせて喋るよなあ、最初のうちはいいんだよ、酒の酔いがフッとさめて、こう、からだ全体が重くなってしまうような感覚の時がよくあるが、あれに似てるな。

『ロング・レカナスンの作戦でさ』とか、『タムカンのあの女の子を憶えてるか』とか、『Bレイションの食事だけど』とか、そうやって話し始めた瞬間に、いやな、重い感じがからだに詰まってくるんだな、極端に言うと、フエとかダナンとかクイニョンとかタイニンとかビエンホアとかミトーとかすらすら口をついて出てくるしそれらの町の情景もことこまかに頭の中に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あるんだが、果たしてあの頃オレは本当にあそこにいたんだろうか、なんて考えてしまうこともあるんだ、オレが今でもカンボジアとかにノコノコ出かけていったりするのはそういう妙な疑問を確かめて、ああやっぱりここにあの時もいたんだ、とはっきりさせるためでもあるんだよ……」

当時のベトナムには、有名なピューリッツァー賞の沢田教一や、その短い一生が映画にもなった一ノ瀬泰造、不屈の報道写真家嶋元啓三郎らがいたし、その他にも、純粋でパワフルなカメラマンやジャーナリストが大勢いた。

わたしは三年半ほどベトナムにいたことになるが、香港やシンガポールへたびたび逃げ込んでいたし、第一回のパリ会談の頃、これで戦争も終わると勝手に決め込んでさっさと日本へ帰って来てしまった。その後もベトナムに踏みとどまり、混乱のカンボジアへも踏み入って行った多くの同業者とはだいぶ違っていたわけだ。

前述の三人だけではなく、何かを求めてベトナムにやって来たカメラマン、ジャーナリスト達は、もの静かな人が多かったが、からだの内側がギラギラしていた。わたしはいつも自分だけは違うような気になっていた。確かに戦場に行き、ネガを切り売りしていたのだが、わたしの横須賀の実家が裕福な貿易商だったということが大いに関係していると思う。

親の生き方を否定して飛び出したにしては恥かしい限りだが、香港の銀行に送金して貰った

ことも一度や二度ではなかった。

そんなことを気にすることはない、君だって現実に従軍してるんだから、同じだよ、とみんなは言ってくれたが、わたしは結局ベトナムで自分の限界というものを知ったことになる。

限界、何となくいやな言葉だが、わたし達は子供から大人になる過程で自分のそれを知らなければならない。両親が四十を過ぎてからの子供で、しかも一人息子として過度な期待と愛情を受けて育ったわたしはベトナムに行くまでそういう機会がなかった。

戦場には逃げるところがない。わたしは戦場で初めて自分の恐怖心を許すことができた。

ベトナムから帰って来て、すぐに友人達と小さな会社を作った。ＭＩＴに行っていた親友が資金を求めてわたしと組みたがったのである。親友は、プラスチックカードに磁気テープを塗布する際のちょっとした新技術を持っていて、ベンチャー企業という言葉さえなかったその頃、たった四人だけの小さな会社はカードブームに乗ってあっという間に年商十億を超えてしまった。

わたしは四年間その会社の代表として過ごし、その後、新技術系企業専門の投資会社を設立した。大手銀行が新技術・新素材というものに見向きもしなかった時代であり、競争相手もいなかったし、前の会社で憶えたノウハウも充分にあって、わたしの資産は確実に増えていった。

わたしの成功はベトナムのおかげだったかも知れない。ボンソンの米軍基地のレーダーを見に行ったことがあって、そのレーダーは超小型ながらハノイ、北京までをカバーできるとんでもない性能を持っていて驚いた。

「……奴ら（ベトコン）にはガッツがある、オレ達は科学に頼るしかないんだ。……」そう言って赤外線の探知器を手離さない将校もいた。

結局アメリカの物量と科学技術はベトナム民族の闘争心に敗れ去ったわけだが、わたしは戦場における新素材や新技術に大いに興味をひかれていたわけである。

投資会社が順調な回転を始めた頃、わたしは、平凡で、目が大きくて、ロンドンに留学していて、チェロを得意とする三歳年下の女と結婚した。

「……お前は幸福者だ、日本の女は優しくてきれいで世界一だ、そういう女のいる国の男として生まれたお前は幸福だ……」

ベトナムの米軍兵士で、日本で遊んだことのある者はよくわたしにそういうことを言った。彼らが知っている日本女性といえばほとんどがバーのホステスかトルコ嬢だ。わたしの妻は時時オールヌードでチェロを弾くことがあり、そういう時などに、この女を見たらあの泥塗れの兵士達は何と言うだろう、と考えたものだった。

男の子が生まれた頃、その子を写真に収めるうちに、妙なズレを感じるようになった。最初

は、息子の一歳の誕生パーティの時だった。葉山の自宅の庭で、バーベキューをやり、妻の両親を始め大勢の人が集まった。わが息子は湘南の陽光を浴びて妻が元町のアンティークショップで探してきたというイタリア製のベビーベッドに横になっていた。わたしはふと思いたってしまい込んでいたライカを取り出し三十五ミリのレンズを息子に向けた。その時、火薬の匂いがした。実際にまだカメラに残っていたのか、それとも生理的な記憶が蘇ったのか、それはわからない。

その夜本当に久し振りにベトナムの夢を見た。ふいにベッドから跳ね起きて腋の下の汗を拭うような、そういうタイプの夢だったが、それ以来、からだのどこかに空洞ができてしまった。その空洞は急にできたものではないと思った。水滴が岩を溶かすようにゆっくりとわたしを侵食していたのだろう。

空洞を自覚すると、現実との間にズレができる。自覚すると、意識がそこに行ってしまい戦場での思い出したくないシーンが打ち消しても打ち消しても浮かび上がってきたりして、例えば商談中にそれが起きると、相手と自分の間に目に見えない壁があるような気になった。

軽いノイローゼだろうとわたしは思った。

妻に相談したところ、彼女は、写真を撮ってみたら、とアドバイスしてくれた。

それも自分の子供を撮るとかそういうのじゃなくて、プロとしてお金を貰って撮るのよ、そ

う言った。

最も信頼する部下に会社をまかせ、わたしはまず小さなPR誌のカット写真を撮ることから始めた。やがて総合雑誌のグラビアを担当することになり、人物写真の依頼がたくさん来るようになった。石を投げればカメラマンに当たると言われるような供給過多の時代に、仕事が回ってきたのは、恐らくわたしの経済的な余裕のせいだろうと思う。どんな大手の出版社、雑誌の編集部を訪ねても、わたしよりいいスーツを着た者はいなかったし、わたしよりいい車に乗っている者もいなかった。それにわたしは金が欲しいわけでもなかった。日本は平和だから、高級な布地と仕立てのスーツを着てベントレーやフェラーリで乗りつけ、「三年ほどベトナムの戦場にいました」と言い、「問題はギャラではなくて仕事の内容です」とつけ加えれば、それだけで信用された。

わたしは主に著名な人物のポートレートを撮るようになった。女優や財界人や小説家やカーレーサーのような人達である。わたしは戦場で撮るのと同じように彼らを撮った。レンズのこちら側と向こう側、すなわちわたしと被写体に関係性を一切持たせないというやり方だ。それは相手の肩書きや地位や背景に意味を持たせないという方法なので、一部の著名人からは支持された。支持してくれた人は、ポートレートが必要な時は必ずわたしを指名するようになり、また他の人にも紹介してくれたので仕事は定着した。

あなたはゴーギャンみたいね、とある日妻が言ったのを憶えている。息子が幼稚園の年少組に通い始めた頃だったと思う。

実業家からカメラマンになった人ってあまりいないんじゃないの？　ゴーギャンだって役人から画家になったのよね。

ボクは子供の頃からカメラマンになりたかったんだが、とわたしは言った。

今みたいなカメラマンじゃなくて、もっと決定的な瞬間を撮るカメラマンになりたかったんだ、

でもポートレートの評判はいいんでしょう？　今みたいなのはいやなの？

いやじゃないよ、いやだったらやらないからね、

どういう感じで撮ってるのかしら、

普通だよ、

昔のこと思い出したりする？

ファインダーを覗いている時ってことか、

そう、あなたが今撮ってる人は成功している人ばかりでしょう？　ベトナムではそうじゃなかったでしょう、

ふっと浮かんでくる時はあるよ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com